



広島市に原爆が投下されて8月6日で75年。県内の被爆者は高齢化で年々減少しています。

2020年8月6日付 大分合同新聞1面

被爆者の記憶風化懸念

広島市に原爆が投下されて6日で75年になる。大分県内の被爆者は長崎市と合わせて482人(3月末時点)。高齢化で年々減少しており、体験を語り継ぐ機会がなくなった。「戦争を一度と繰り返さぬよう、体験を伝えたい」。語り部たちは惨劇の記憶が風化しないか、心を痛めている。

大分県原爆被害者団体協議会(県被団協)の永島三歳会長(79)は4歳の時に広島で被爆した。悲惨な体験を後世に伝える語り部の一人だ。1945年8月6日午前8時15分、爆心地から約2キロ離れた広島市南観音町の自宅近くに住んでいた。空襲警報が解除され、家の外で近所の友達と遊ぼうとしていた時だった。

左後方で閃光を感じ、振り返ると落下傘のような物が見えた。再び前を向いた直後、爆発音があった。「爆風が来たのだろうか覚えています」。



広島での被爆体験を語る県原爆被害者団体協議会の永島三歳会長(79)氏。白杵市野津町。撮影・江藤成吾

県内、年々減る実体験の語り部

「命の限り伝えたい」

「突然、原爆を落とされ、人々は真っ黒焦げになって死んでいった。悲惨な戦争は絶対にしてはならない」。

「突然、原爆を落とされ、人々は真っ黒焦げになって死んでいった。悲惨な戦争は絶対にしてはならない」。

「突然、原爆を落とされ、人々は真っ黒焦げになって死んでいった。悲惨な戦争は絶対にしてはならない」。

「突然、原爆を落とされ、人々は真っ黒焦げになって死んでいった。悲惨な戦争は絶対にしてはならない」。

① 記事を読んで文中の () に数字を入れてください。

大分県内の被爆者(被爆者健康手帳を持つ人)は広島での被爆が(225)人、長崎が(257)人の合わせて(482)人。平均年齢は(84.83)歳。データが残るうちで最も古い2002年の(1122)人と比べると半分以上になった。

②被爆体験を語る人たちが心を痛めているのはどんなことですか？

体験を語る人がわずかになったことで、惨劇の記憶が風化しないか、心を痛めている。

③小中学校などで平和への思いを訴え続けてきた県被団協の永島三歳会長は原爆や戦争について何と話していますか？

「突然、原爆を落とされ、人々は真っ黒焦げになって死んでいった。悲惨な戦争は絶対にしてはならない」。

④世界では大国が核兵器を保有し続けています。長崎で被爆した奥城和海さんはこうした現状について何と話していますか？

「日本は米国の核の傘に守られているが、唯一の被爆国として核廃絶にもっと努力すべきだ」。

⑤語り部たちを「命ある限り、語り続けたい」と突き動かしているものは何でしょう？

生き証人としての使命感

白血病を発症するのではないかと恐怖や、今も残るやけどの痕。周囲の視線に惨めな思いをしたこともあった。

「生き証人としての使命感が語り部たちを突き動かしている」。

大分県内の被爆者 県による被爆者健康手帳を持つ人は広島での被爆者が25人、長崎が157人。平均年齢は84.83歳。データが残るうちで最も古い2002年の1122人と比べると、半以下になった。